『惜春譜』を読んで

天草二

別冊シャレード71号「天城一特集8」が出ました。天城一の短編は、本当に短い。読むものにすれば、そこまで短くしなくてもいいだろうと思うのだが、あっという間に解決編になだれ込む。そのために、必要な解決を示さないケースもあります。自明であろうとか、そんなことはわかりきっているから説明の要はないだろうとの判断かもしれません。それは時々困ることになります。一体誰が犯人かわからない短編も存在するからです。と思っていると、増刊マンスリー第1号（密室34号）のM氏の解説に、「天城一氏の作品は、他の作家の作品とは、非常に異なる姿勢で書かれています。一言で言うと、彼の小説は、評論と同じ姿勢で書かれているのです。」とありました。なるほど、そうであれば、もとにある作品やそのトリックに関係のないところでは、あまり重点がおかれず省略される場合もあるわけです。そのことによって作者が読者に仕掛けた罠を作者が作中でまったく言及しないこともあります。そのために、いろいろと面白いことが生じるわけですが、ここでは、『惜春譜』を題材にしてみます。

昔、大学の文学研究会の読書会で土屋隆夫『危険な童話』を取り上げました。そのとき、ある女学生が、犯人の行動がおかしいと言い出した。何故、そんな行動をとったのか、わからないというのです。普通なら次のような行動をとるはずだと。私に説明を求めてきました。ところが、そんな雰囲気になれていなかった私は、とっさに、彼女の言うことがわかりませんでした。私はその理由をきちんと説明できなかった。すると、彼女は一言、『だから推理小説って嫌いなの、ご都合主義だから』唖然とした。勿論、あとでゆっくり考えたら、当然犯人はそのような行動をしなければならなかったわけです。そうしないと犯人のトリックが全うされないから。だいたい、土屋隆夫の理小説である。そのあたりに粗漏のあるはずがありません。でも、結局その点を彼女に説明する機会がなかったので、彼女は今も推理小説に対していらぬ偏見を持っているかもしれません。

さて、『惜春譜』であす。もし彼女がこの作品を読んだとしたら、ある1点を指摘して、おかしいというかもしれません。今度こそ、それには答えられそうにありません。何せ、天城氏の作品でギリギリまで切り詰められていますから、こちらにそれを説明する手立てがありません。すると、またしても、『だから推理小説は嫌いだ。ご都合主義で、そんな行動を犯人がとったら、普通ならみんな気がつくはずだ。』と言われそうです。何が問題か。未読の方は最初から読んでみてください。また、未読でない方ももう一度、読んでみてください。どこがおかしいと彼女は指摘するのでしょう。密室物でも、飛び切りの心理密室である。衆人環視の中で、ある男が小島

の上で射殺されました。誰も小島に近づいたところを目撃されていません。しかも男は近距離からピストルで接射されています。勿論あたりには凶器は見当たりません。従って男が密かに手に持ったピストルで頭を撃ち、凶器は海の底に消え、それを目撃者が誤認したと。目撃者の証言にもかかわらずその男は自殺したのだと結論付けるしかありえない状況にあります。一応捜査はそこまでで打ち切りとなります。一体、誰がどうやって、この犯罪を決行できたのか。実行不可能な犯罪の完成です。でも、『トリックを見せるためにプロットを必要上の限度いっぱいに削れ』と作者が言い、あっという間に解決の場面に読者をいざないます。さて、もう一度、確認をしますが、いったいどこに不備があるというのでしょう。未読の方も、そうでない方ももう一度読んでみませんか？彼女の指摘する小説としての不備とは何でしょう。実際、作者の下にはその指摘がいくつか寄せられているようです。ここで、トリックに触れます。作者も、この時間差密室には自信満々のようです。この作品のメイントリックは、「被害者は死んでいないのに、目撃者には死んだと思わせ、実際にはその直後に殺す。」というものです。SRの読者ならば、これが時間差密室だと気がつくはずです。しかし、男と犯人の間に共犯関係が成立しないことは、この短さにもかかわらずかなりきちんと書かれています。そうすると共犯でもないのに、この時間差密室が成立するのか？というところが問題になります。M氏の解説によりますと、『惜春譜』では、すべて犯人の計画的犯罪であり、被害者は犯人に協力して、自分から進んで死んだ振りをしたわけではありません。これがこの作品の最大のポイントでしょう。そのために、共犯者を一人想定しなければいけないところが少し、難と言えばいえそうですが。彼が、ライフルで被害者のそばを狙います。被害者はそれに驚いてとっさに身を伏せ、死んだ振りをします。これが目撃者を誤らせます。そのとき、射殺されたものと。そして、その間に犯人は悠々と海を渡り彼を近距離から射殺するわけです。実に巧妙な時間差密室です。しかも、この短い文章の中に全ての手がかりがさまざまに散りばめられています。うまいものです。作者としては、作品はこれで十分なわけです。でも、天城氏の作品ですから、ここからいろいろと解釈の余地が生じます。さて、ここで、もう一度、質問ですが、どうですか。もうわかりましたか。本文中には一切の記述がありません。

実は、『このミス』の２００３年度第２位『GOTH』を読みました。残念ながらこの作品の雰囲気やあり方にどうも肌が合わず、読後も妙な感じですっきりしない作品でした。でも、そう思って読んでいると結末でアッと驚かされる、恐るべき真相が暴露されるわけです。何度「アッ」と言ったことでしょう。推理小説なのですから当然気づいてもいいところをうまく作者の仕掛けた罠にはまってしまい、悔しい限りです。この短編集は６篇からなっているのですが、さすがに５

回「あっ」と言ってしまってからは6回目ではやっと途中で作品の構成に気づくことができました。というわけで、私はそれぐらいあっさりとだまされやすいわけでして。実は、天城氏からこの指摘を受けたときも、「あっ」と驚いたものでした。そのあと更に「あっ」と言うことが待っていたわけですが。

一体、この時間差密室を構成する上で、小説上の不備とは何でしょう。実際、この状況になれば、たちどころに不審に思われる事柄があります。そこで、もう一度作品のここの部分にもどってみて、検証をしてみましょう。

「南北３００メートル、高さ１０メートルの崖下の狭い砂浜だ。両端は小さな岬で区切られている。怨念岩は７０メートル沖、高さ１０メートル、三畳敷きほどの岩だ。左右に岩礁がひろがり、砂浜との間に弓なりの開水面を抱く。恐ろしげな名を聞かなければ、人里はなれた平凡な風景と思うだろう。がけを上る小道がひとつ。手入れの悪い雑木林の中をうねって、背後の畑をぬけて、県道まで1キロ、そこから1番近い電話まで、また1キロはある。」そんな辺鄙な場所である。「パトカーを飛ばして駆けつけました。小1時間はたっていたでしょう。」事件後、1時間しか立っていないことがわかる。さらに、高波部長刑事はあたりの探索を徹底的にする。2週間にわたって調べまくるのだ。見つけたのは、北の岬の付け根のあたりで藁灰をひとつ。つまり、付近の徹底探索によって、何も見つからなかったことがわかる。そして、「女が、服を着たまま、海へ入っていくではありませんか。胸までつかりながら」逆にいえば、胸までしかつからないことがわかる。つまり、犯人は胸までつかりながら被害者に近づいていったわけです。ここで高波部長刑事は犯行当時の状況を再現できたわけです。では、犯人はどのように怨念岩に近づいていったのでしょう。服を着て、近づいていったのでしょうか。そう、勿論そんなことはありません。時間は1時間しかたっていません。当然、服は濡れているわけです。すぐに、犯行は、露見したでしょう。では、どうしたのでしょうか。ここで、次の文章が気にかかります。「自殺しました。犯人が自殺したと聞いて、すぐに首を吊りました。」どうして、自殺したのでしょう。犯人が自殺する前に自殺をするのなら、犯行が露見するのを防ぐためという名目があるのに。同時に死を選ぶのは何故でしょう。それは見てはいけないものを見たからと解釈すればどうでしょう。そう、犯人は服を全て脱いで、裸体で被害者に近づいて行ったのでしょう。少し、考えれば、当然そのことに気づくべきですが、まったく、思いもよらない指摘です。時間差密室に気を取られていたというべきでしょう。そうすると、次の問題が起こります。体はずぶ濡れになっています。さあ、犯人はどうしたのでしょう。そのまま、乾くのを1時間待つのでしょうか。早春の一日、日暮れ近くです。すぐには、乾きません。そのままでは、やはりすぐに

疑われてしまうでしょう。タオルで体を拭く以外ありません。さあ、問題です。タオルはどこにあるのでしょう。付近は、徹底的に探索されています。どこにも、隠してないと見るべきです。砂浜に埋めてあったのを掘り出して、また埋めたというのはだめでしょう。「そんな説明もない小説なんて」と、言われそうです。タオルの記述は、天城氏の流儀に従って、トリックとは関係ないので、全てカットされています。そこで、もう一度作品を読み返そうと思うと普通と違う構成になっていることに気づきます。多くの作品は表題と作者名、そのあとすぐに作品が始まりますが、この作は違います。「春嵐」「火の島の花」とこの作が、表題と絵の構成になっています。早春の一日、陽は沈みかけています。それをバックに黒い帽子、黒のスーツ姿の女性の挿絵が見えます。この人が犯人と見るべきでしょう。すると、彼女はやや大きめのバッグを持っていることがわかります。名門の美女が外出のときそのような大きなバッグを持ち歩くでしょうか。そこに違和感を感じます。なるほどというわけです。参りました。挿絵の人を巻き込んで作品を作るなんて。作者にあまりにうまくだまされてしまったので、読者の皆さんも騙されていないかあと思い、この一文を書きました。騙されましたか。それとも、やっぱり私だけかなあ。